

プーリア州ポッジアルド市のサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会における建設プランと壁画の図像プログラム

—建設プランの変更との関係について—

The Plan of Construction and the Iconology of Mural Paintings of

Chiesa di S. Maria degli Angeli, Poggiardo, Puglia

—Relationship with the Plan of Construction Changed—

木村 仁美

Hitomi, KIMURA

要旨:

本稿は、プーリア州レッツェ県ポッジアルド市の中世洞窟教会、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会における建設プランの変更点を教会内部に描かれた壁画との関係を軸に考察したものである。結論としては、当教会は、内接ギリシア十字式プランを左側廊と身廊の通り道に切り石で壁を作ることで左側廊を個室化させ、左側廊部の壁画を描き変えた。この後に、床の高さを下げる、南壁面の壁画を描き変えが行われたと考えられる。個室化した空間の用途は洗礼室が有力だと推測する。また、本稿の中では、当教会の図像とパードゥレ・エテルノ教会（グラビーナ・イン・プーリア市）の図像との類似する聖人像、および主祭壇の聖母子像の特徴について興味深い点が見られた。

キーワード：壁画、洞窟教会、プーリア州、建設プラン、個室化

Abstract:

This paper is written about *Chiesa di S. Maria degli Angeli*'s plan of construction changed on the basis of the iconology of mural paintings. I think that the plan of inscribed cruciform was deformed at the point that the left transept change room used for other purposes. Along with it, people rewrite mural paintings of the left transept. After people lowered the height of the floor and rewrite mural paintings of the south. And I guess that room use has changed may had been used as a baptism room. In addition, in this paper, I consider interesting thing about iconography of figures of saint which similar to iconography of *Chiesa del Padre Eterno(Gravina in Puglia)* and about feature of iconography of Maria and young Christ.

Keywords: mural painting, cave church, Puglia, plan of construction, degradation, changing room used for other purposes

1. はじめに

一昨年度から昨年度に渡り金沢大学人間社会環境研究域フレスコ壁画研究センターの「南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト」に参加した中で、南イタリアに散在する数多くの洞窟壁画を目にすることができた。本稿は、金沢大学人間社会環境研究域国際文化資源学研究センターの組織的な若手研究者等海外派遣プログラム「文化資源学フィールド・マネージャー養成プログラム」により2012年度に派遣された際に入手した資料を主に利用し作成している。

ここ南イタリアの洞窟教会の研究について、個々の教会自体には調査結果が残っているが体系的な研究はされておらず制作者・制作年代を特定することは非常に困難であり、加えて、洞窟教会は建設プランの変更を見分けることが地上に立てる建物と比べて難しいということが挙げられる。

2. 洞窟教会としてのサンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会

当教会は市街地の中心に位置し、教会の存在は1929年に道の下から偶然発見された。1955年頃にローマ中央修復研究所によって壁画の切り出しおよび修復が行われ、その壁画を保存・展示するため街の広場にアルド・モーロ博物館が新設され1975年に開館した。壁画が元あった地下教会も整備され1999年にレプリカが設置された。教会の図像学的な先行研究は、1939年 Maria Luceri によって聖人像の人物同定が発表されているが、聖人像の同定はそれ以降特に変更されていない。制作年代に関しては諸説あり、ビザンティン帝国からノルマン王朝シチリア王国による支配下へと変わった12世紀半ばに設立という説や、図像学的に13世紀頃とみる説がある。内接ギリシア十字型の建築様式から、建設当初はギリシア系の教会（ビザンティン様式）だと考えられる。

3. 先行研究における図像解釈の再考

(1) 聖人像の人物同定の誤り

Fig. 1 において黒字が先行研究での番号付けであるが、1つの番

号で3つの聖人像を含む場合もあり、聖人像の同定を確認するには不便であった。そのため、本稿では、聖人像ひとつひとつに番号を付けることとした。赤字が本稿で付けた番号である。19と20の間と26~29が描かれる柱の南側にも現在残っている壁面が存在するが、何が描かれていたのか判別することができないので、本稿においては番号を付けないこととした。本文中では、便宜的に、聖人を意味する Saint の略語 St. と像を意味する figure を組み合わせて、fig-St. 1, fig-St. 2 のように表記する。当教会は厳密には東を向いてはいないが、また、便宜上、祭壇側を東とし、向かって右を南、左を北、祭壇と反対側を西と表現する。

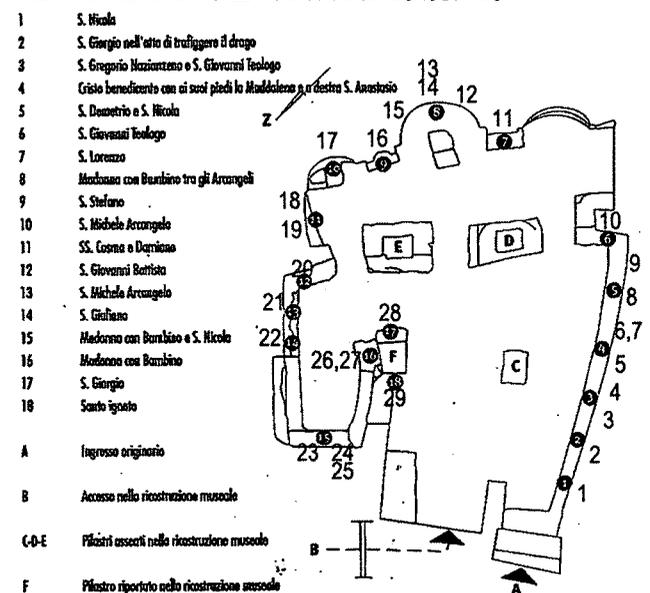


Fig. 1 聖人像の位置

(2)南壁面に描かれた3組の対なる聖人像について

fig-St. 3 から fig-St. 9 までの、キリストの足元にいる小さなマグダラのマリア像 (fig-St. 7) を抜いた、6人の聖人像は隣り合う2人で1つの枠の中に描かれている。組み合わせは、神学者と使徒ペテロ、司祭職とキリスト、司祭職とサン・ニコラである。神学者と使徒ペテロは、東方正教会の神学者が聖ペテロを使徒の中でも首位であると強調していることから2人の組み合わせは正教会の教えを体現しているともいえる。これに対して、他2つの組み合わせは階級的にも知名度も信仰心の強さからもつり合いが取れていない。そのため、組み合わせによる共通概念を呼び起こさせるためではなく、おそらく、キリストやサン・ニコラといった有名な聖人と地元で有名な殉教者や聖職者を並列させる聖像表現を通して、キリストやサン・ニコラへの親しみやすさを生み出したかったと考えられる。

ベーマ (聖域/内陣) では左右対称に均整のとれた図像配置であり、また輔祭聖人がアプシスを挟む形で描かれているため、身廊部もまた向い合う壁面に対称性がある方が、聖堂空間として均一性が生まれる。だが、南壁面の向い側である北壁面に現存している壁画は fig-St. 21 と fig-St. 22 の2つであり、それは1つの聖人像に1つの枠が付けられており、さらに、fig-St. 3, 4 の向い側にあたる壁の部分は現在その手前に切り石が積み壁と向かい合いになっていない。また、fig-St. 3-9 は対の組み合わせで均一性のとれ

サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会 聖人像リスト (本研究による再考)

- 1 サン・ニコラ San Nicola
- 2 馬に乗った聖ゲオルギウス San Giorgio a cavallo
- 3 神学者 Teologo
- 4 聖ペテロ San Pietro
- 5 司祭
- 6 祝福を受けるキリスト Cristo Benedicente
- 7 マグダラのマリア Maddalena
- 8 司祭
- 9 サン・ニコラ San Nicola
- 10 神学者聖ヨハネ San Giovanni Teologo
- 11 輔祭 (サン・ロレンツォ San Lorenzo ?)
- 12 天使 (右)
- 13 聖母マリア Madonna
- 14 幼子キリスト Bambino
- 15 天使 (左)
- 16 輔祭 (サント・ステファノ Santo Stefano ?)
- 17 大天使ミカエル L'Arcangelo Michele
- 18 ダミアン S. Damiano
- 19 コスマス S. Cosma
- 20 洗礼者聖ヨハネ San Giovanni Battista
- 21 大天使ミカエル San Michele Arcangelo
- 22 (サン・ジュリアーノ San Giuliano ?)
- 23 サン・ニコラ San Nicola
- 24 聖母マリア Maria
- 25 幼子キリスト Bambino
- 26 聖母マリア Maria
- 27 幼子キリスト Bambino
- 28 聖ゲオルギウス San Giorgio
- 29 未知の聖人 Santo Ignoto

} 聖母子
} 聖母子
} 聖母子

※番号、聖人名 (日本語)、聖人名 (イタリア語)、図像名という順番で聖人名を載せた。日本語の聖人名は西洋美術解説事典で掲載されている名前を記載した。

た並び方をしているのにもかかわらず、fig-St. 1, 2 の2つで突然その均一性が崩される。

(3)パードゥレ・エテルノ教会 (Gravina in Puglia) の聖人像との類似

パードゥレ・エテルノ教会 Chiesa del Padre Eterno はプーリア地方の中腹部バーリ県のグラヴィーナ・イン・プーリア Gravina in Puglia にある洞窟教会である。2011年度のフレスコ壁画研究センターによる「南イタリア中世壁画診断調査プロジェクト」の中でエットーレ・ポマリチオ・サントーマジ財団博物館¹の小展示室に保存・展示してあった壁画がこの後陣部分の壁画であると証明された²。ここに描かれていた聖人像らは後陣に向かって左から、聖ペテロ、不明の聖人、聖ニコラウス、聖母マリア、パントクラトールのキリスト、洗礼者ヨハネ、助祭、聖レオナルドゥスと記述されている³。この図像の中で、不明の聖人、助祭、聖レオナルドゥスに着目してみると、ポツジャルドのサンタ・マリア・デ

ツリ・アンジェリ教会の壁画と共通点が多い。

まず、1つ目に、不明の聖人と伝サン・ジュリアーノについて。これら2つの図像を見比べると、左手に白い十字架を持ちもう片方は手平をこちらに向けている鬚のない若い聖人として描かれ、先が巻き毛になっている髪型や右肩が空く外套とその縁の描き方も同じである。これらから、同一聖人像と考えられるが、両教会とも聖人名を確定する明確な根拠が示されていない。しかしながら、両教会に共通する聖人であることからプーリア州の地域での信仰心が厚かった聖人ではないかなどと発展が考えられるので、今後プーリア州の地域の同時代の教会内で同じような図像を探し考察を深めていってほしい。

2つ目に、助祭・聖レオナルドゥスと両輔祭聖人について。助祭と聖レオナルドゥスの人物同定の論証は本項の最後に記載する。これらは、貫頭衣(ダルマチカ、ステハリ)におそらくオラリ(大帯)と呼ばれる帯状肩部装着品をかけている姿が共通する。また、聖体器や吊香炉を持っているところも共通する。ここで、この2つの教会の聖人像の顔の表情の描き方が違うことに気付いてほしい。例えば、パードゥレ・エテルノ教会の聖レオナルドゥスについて「その顔には、こけた頬を強調するS字状の細い数本の線が描かれ、定型化された図像パターンのビザンティン様式には珍しく、リアルで生彩のある表情をしている」⁴と述べられているように、パードゥレ・エテルノ教会はビザンティン様式から離れていっていることがわかる。それに対して、サンタ・マリア・デツリ・アンジェリ教会の輔祭聖人や内陣部分に描かれた聖人の表情はどれを見ても顔において個性が表現されることはない。よって、表情の面ではサンタ・マリア・デツリ・アンジェリ教会はビザンティン美術の要素が強いとわかる。

先行研究に付け足す形で、パードゥレ・エテルノ教会後陣部に描かれた助祭と聖レオナルドゥスの人物同定を行う。パードゥレ・エテルノ教会における名前のわからない助祭の右肩付近には、若干銘文「...NVS」が読み取れる。この教会は、ラテン語表記であり、教会後陣部に描かれた聖人らが有名な聖人であることから、輔祭聖人の筆頭でありモンレアーレ大聖堂にもチェファルー大聖堂でも輔祭聖人として描かれるステファノス(ラテン語ではステファヌス STEPHANVS)だと考えられる。続いて同じ教会の聖レオナルドゥスの図像は、最終的に聖レオナルドゥスだと私も判断したが、その同定の根拠に用いられている右手に持つ持物は足枷ではないと考える。その聖人が手にしている輪には3本もの鎖が付いており、足の自由を奪う拘束具としては過剰に感じるため、足枷とは考えにくい。加えて、この聖人が向かって左隣の聖ステファノスと同じく輔祭聖人であることから、右手に持っているものは吊香炉だと考えられる。個人名の特定は、残された銘文からレオナルドゥス「LEONARDUS」と考えられる。

(4)主祭壇の年代に関する諸説

主祭壇の年代について、2つの仮説を提示する。1つ目は、教会ができた歴史的背景から仮説を立てる。教会を作る際に最初に考えるのは主祭壇であり、当教会の主祭壇には後世に新しい聖像に変更された痕跡は見当たらないので、主祭壇の壁画は建設当初の時代区分となる。歴史背景から見ると、当教会の建設は12世紀半ば～後半なので、主祭壇壁画 fig-St. 12-15 も同じ頃描かれたと考えられる。2つ目は、主祭壇に描かれた「聖母子と天使」の図像

学的特徴から仮説を立てる。当教会の主祭壇(アプシス)に描かれている聖母子像は、聖母子坐像であり、天使の持物は吊香炉である。一説によると、天使の持物で香炉が登場するのは、後期ビザンティンと区分される13世紀(1280年)にキプロス Moutoulas の Panagia tou Moutoulas という教会のアプシスが初めてとなる⁵。その後、15世紀に同じくキプロスで5例確認されているが、その研究結果の中では150例中6例しか確認されていない。さらに、当教会と同じく、聖母子像が坐像でありアプシスに描かれているものは Koilani の Ag. Mavri という教会のみと、非常に希少であることがうかがえる。

つまり、当教会の主祭壇の制作年代について考えられる仮説は、後期ビザンティンにおいて描かれるようになり南イタリアに流れてきた13世紀以降、もしくは、南イタリアで生まれビザンティン美術に逆輸入されたと考えて歴史的制作年代である12世紀半ば～後半の仮説である。どちらの説にせよ、まだまだ不十分な点が多いので、今後、聖母子と香炉を持つ天使の図像の作例の発見を期待する。

(5)聖人像の描写の比較

図像解釈再考の最後に、その描写されている様を比較し時代の変化を探る。例えば、3点存在する聖母子像を比較すると、fig-St. 24, 25の聖母子像は他の2つの幼子キリストと異なり、円光部分の十字架には文字が書かれていない。また、fig-St. 24は口角を少しあげてほほえみの表情をしており、ほほえむという仕草を与えた画家の精神文化の変化がうかがえることから、fig-St. 24, 25は他の聖母子像よりもラテン文化の影響が強くなる、つまりは新しい時代に描かれた図像だと判断できる。

4. 建設プランの変更点への考察

現在残されている洞窟教会の状態から、変更点への裏付けを行う。当教会は、内接ギリシア十字型の変形型だと考えられ、身廊と左側廊の間には西の柱から現在の入り口の方までつながる壁のような隔たりの存在が切り石を積んでつくられている。これらから、左側廊部を今までと違う用途で利用するために切り石で仕切りを作ったと考えられる。描かれた聖人像に洗礼者ヨハネがいることから、個室化した空間の用途は洗礼室が有力である。次に、床の高さについて。Fig. 2は先程の積み上げられた切り石の部分を実際から見たものである。



Fig. 2 切り石の壁を東側から撮影した写真

切り石が積んである床の高さより、現在残っている一番低い床の高さ（鉄格子の下の部分）の方が低いことがわかる。これは、切り石を積んだ後（同じとき、または後世）に、床の高さを下げたためである。この一番低い床の高さは教会全体の床の高さであるため、教会全体で床の高さを下げたことがわかる。また、教会全体には腰掛けと思われる出っ張りがあり、それは壁画の下に存在する。つまり、壁画が描きかえられた後腰掛けの位置を変えずに床の高さを下げていることがわかる。

ここで、典型的な内接ギリシア十字プランとしては、身廊と右側廊が広すぎることに疑問が残るが、南側廊部に関しては、fig-St. 1, 2の壁画が隣のfig-St. 3などと時代が違うことから、後世に描きかえられたと考えられる。身廊部の西側は今の入り口となっており現状から変更点を考察するのは困難であった。

5. まとめと今後の展望

当教会の建設プランの変更の流れをまとめる。建設当初、内接ギリシア十字式プランでつくられた教会には、ビザンティン美術の特色を持つ壁画が左右対称のバランスを持って描かれた。その後、左側廊と身廊の通り道に切り石で壁を作ることで左側廊を個室化させた。この個室の用途に合わせて左側廊部の壁画(fig-St. 20-25)を描き変えた。個室化した空間の用途は洗礼室が有力である。この後に、床の高さを下げる、南壁面の壁画(fig-St. 1, 2)を描き変えが行われたと考えられる。

この点に着目し、元あった教会での綿密な調査、ローマ中央研究所での修復当時の情報収集が必要とされる。また、南イタリアの体系的な図像学研究を進めるため、パドゥレ・エテルノ教会との類似する名のわからない聖人像と聖母子と共に描かれる吊香炉を持つ天使像に着目したデータ収集が必要とされる。

謝辞

今回の執筆を行うにあたり、主任指導教員の宮下孝晴教授、副指導教員の先生方、プーリア州の文化財監督官フルビア・ロッコ女史、サンタ・マリア・デッリ・アンジェリ教会の管理人グレコさん、南イタリア中世壁画群診断調査プロジェクトメンバーの皆様、フレスコ壁画研究センターの皆様、そして、共に調査し協力し合った関谷倫寿くん、執筆を支えてくれた同じ研究室の皆様、多くの方にお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

¹ Fondazione Ettore Pomarici Santomasi. グラヴィーナ・イン・プーリアにある博物館。サン・ヴィート・ヴェッキオ教会 Chiesa di S. Vito Vecchio から 1957 年に剥がされた壁画を保存・展示している施設である。

² 宮下孝晴・宮下陸代 2012

³ Alba Medea(1939)の記述に宮下が最小限の「訳者註」を挿入し誤謬を訂正したものを参照した。宮下 2012 p. 49

⁴ 同 2012 p. 49

⁵ 菅原 「聖母子像をともなう天使の役割」 2011

参考文献

Anacleto Vilei *POGGIARDO GUIDA TURISTICA ILLUSTRATA* Italy Arti Grafiche Fuido 1991
E. マルケジアーニ他/渡辺友市・堺憲一訳 『全訳 世界の歴史

教科書シリーズ 16 イタリア I』 帝国書院 1982
ジェイムズ・ホール/高階秀爾監修『新装版 西洋美術解説事典—絵画・彫刻における主題と象徴—』新装版 4刷 河出書房新社 2010
ジョン・ラウデン/益田朋幸訳『岩波 世界の美術 初期キリスト教美術・ビザンティン美術』岩波書店 2000
北原敦『新版 世界各国史 15 イタリア史』山川出版社 2008
Maria Luceri *La cripta di Santa Maria in Poggiardo (Lecce)* Japiagia IV Italy 1938
益田朋幸 「「デイシス」図像の起源と発展(Ⅱ)—中期ビザンティン聖堂装飾プログラム論—」『女子美術大学紀要』女子美術大学 27 pp. 1-20 1997
宮下孝晴・宮下陸代 「南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト 研究調査報告書 2010 年度」『2010 年度 金沢大学フレスコ壁画研究センター 研究調査レポート』 Vol. 1 pp. 1-22 金沢大学フレスコ壁画研究センター 2011
宮下孝晴・宮下陸代 「洞窟教会壁画の現状と美術史的考察」『2011 年度 研究調査報告書』 pp.31-62 金沢大学フレスコ壁画研究センター 2012
宮下孝晴・宮下陸代 「南イタリア中世壁画群 診断調査プロジェクト 研究調査報告書 2011 年度」『2011 年度 金沢大学フレスコ壁画研究センター 研究調査レポート』 Vol. 2 p. 8 金沢大学フレスコ壁画研究センター 2012
オリヴィエ・クレマン/冷牟田修二・白石治朗訳『Que sais-je? 東方正教会』白水社 1965
オットー・ヴィマー著/藤代幸一訳『[図説] 聖人事典』八坂書房 2011
菅原裕文 「聖母子像にともなう天使の役割」『エクフラシス：ヨーロッパ文化研究』 Vol. 1 pp.56-69 早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所 2011
高橋保行『イコンのあゆみ』春秋社 1990
高山博『中東イスラム世界4 神秘の中世王国 ヨーロッパ, ビザンツ, イスラム文化の十字路』第2版 東京大学出版会 1998
上田恒夫・寺田栄次郎・中澤敦夫・木戸雅子訳『東方正教会の絵画指南書 デイオニシオスのエルミニア』金沢美術工芸大学美術工芸研究所 1999
鶴沢 裕・中橋美智子 「東方正教会における祭服の形態とその意味」『東京学芸大学紀要 第6部門 技術・家政・環境教育』東京学芸大学 第48集 pp.59-75 1996
山辺規子『ノルマン騎士の地中海興亡史』白水社 1996

参考 URL

Citta di Poggiardo Lecce <<http://www.poggiardo.com/>> (検索日 2013/05/10)
Otrevie percorsi alternativi nel Salento <<http://www.otrevie.com/>> (検索日: 2013/11/01)
ARCHEO SALENTO Siti Archeologici Vaste <<http://www.archeosalento.it/vaste.htm>> (検索日 2013/11/01)
La cripta e gli affreschi di Santa Maria degli Angeli in Poggiardo <<http://www.fondazioneterradotranto.it/2012/11/20/la-cripta-e-gli-affreschi-di-santa-maria-degli-angeli-in-poggiardo/>> (検索日 2013/07/27)